

コラム 鷗外没後百年に寄せて

学芸の自由は誰が守るか——知友・岩村透と森鷗外

今橋映子（東京大学大学院教授）

没後百年の今日、森鷗外が美術の世界と深い関係にあることは広く知られるようになった。ドイツ留学をきっかけに始まった画家・原田直次郎との交遊。原田や、白馬会の絵画を擁護する美術批評活動。西欧美学を日本に移入する仕事や、久米桂一郎と共に執筆した美術解剖学。宮芳平などの若い洋画家たちに対する優しい眼差しは小説『天龍』に結実し、「うたかたの記」「花子」や翻訳小説『ソクラテスの死』のような芸術家小説の世界も豊かである。さらに言えば晩年、帝室博物館総長兼図書頭に就任した鷗外は、様々な新規事業の傍ら、正倉院拝観者の資格制限を拡張して学者や創作者にその門戸を開いたことまで明らかになっている。これまで森鷗外記念館でも『鷗外と画家原田直次郎展（二〇一三年）』『鷗外ミーツアーティスト展（二〇一八年）』など、多角的に紹介されてきた。しかし『テエベス百門の大都』（木下杢太郎）と崇められた鷗外のこと、美術界との関係も並大抵の深さではない、それを心底気づかされたのは、私自身の三十年にわたる岩村透研究を通してであった（『近代日本の美術思想——美術批評家・岩村透とその時代』上下巻、白水社、二〇二二年）。

岩村透（二八七〇—一九一七）は、明治大正期の美術批評家・美術史家・美術行政家である。岩村透といっても、いまやほとんどどなたも知らない名前だろう。東京美術学校の初代西洋美術史担当教授であり、黒田清輝・久米桂一郎と共に『美学校の三羽鳥』と称された名物先生だった。岩村の名著『巴里之美術学生』（一九〇三年）は当時のベストセラーで、この本をきっかけにパリに憧れて渡欧した画学生たちが沢山いたという。岩村は男爵家の生まれで、十代でアメリカからフランスへと留学し、日英語を流暢に使いこなす三言語使用者であり、フランス語やイタリア語も解した。美校教授になってからは、西洋美術が一般に受け入れられない現状を憂え、一方では画学生たちを励まし、一方では広く一般市民に『美術』の重要性を啓蒙し、そのために『美術新報』『美術週報』などの美術ジャーナリズムでも活躍した。黒田清輝と共に美術行政にも

力を入れ、日本画、洋画、彫刻、建築、工芸などあらゆるジャンルの美術家たちが連帯して社会問題に取り組みするための「国民美術協会」の設立者の一人でもあった。しかし、持病の糖尿病の悪化ゆえ四十八歳で早逝するに至る。

ところで、岩村研究を進めていくと至る所に鷗外の姿が見える。先ず、鷗外が一八九九年小倉転勤になったあと、美校の美術史の講義を引き継いだのが岩村である。この時は鷗外の推薦であったかどうかは不明だが、一九二〇年に鷗外は、慶應義塾文学科創設にあたり、芸術学担当として（慶應が母校でもあった）岩村を推薦し、その後岩村は美校と兼任講師となっていた。鷗外はなぜそれほど岩村の学識を信頼したのだろうか——それはそもそも、二人が、一八九七年に創刊された『美術評論』（画報社）で共に美術批評に取り組んだ仲間でもあったからだ。その後二人は、欧米の美術情報を逸早くキャッチすることが何より大事だと認識し、それを自ら翻訳編集して日本へと伝えるために『椋鳥通信』（鷗外）や『海外消息』（岩村）を長期間にわたって連載した、という共通点もつ。さらには、先に記した『国民美術協会』という美術行政組織が立ち上がる時、鷗外は黒田清輝、岩村透と共に、その発起人の一人になり、会則制定にまで力を貸しているのである。それは何よりも、いまだ美術が社会に受け入れられなかった時代に美術家たちが共闘しようとする動きを、鷗外が誰よりも理解した証である。

鷗外はこうして美術界に関わる中で、岩村の仕事の量と質を誰よりも認識したと思われる。しかも心から驚くのはそれだけではない、鷗外は自分の思想小説における真の「対話相手」として、岩村透を登場させているのである。

大逆事件下の思想弾圧の時代、学問の自由とは何かを密かに問うた小説『かのやうに』（一九二二年）。主人公・五條秀麿の友人で画家・綾小路のモデルが、岩村である。この有名な小説に、岩村透が登場していると気づいている読者はほとんどいない。しかし実は鷗外自身が、娘婿・山田珠樹宛の書



岩村透の肖像 1904年頃 撮影者不明

簡（一九一八年）の中で「旧友岩村透」をモデルに造型したと明かしている。綾小路は（岩村同様）陽気な人物で、親から早く独立して留学した。どれほどの才能があるかは不明だが、こと、秀麿が悩む家柄と学問の相克に対しては、自由思想の持ち主として毅然とした態度を取る。実は岩村透は晩年、大逆事件下の思想弾圧に抗し、自由思想を貫いたが故に美校教授の地位を奪われる事件に巻き込まれた。鷗外はその一部始終を知っていたはずである。

鷗外は「学問の自由研究と芸術の自由発展とを妨げる国は栄える筈がない」（『文芸の主義』一九一一年）と同時代に書く。鷗外や岩村は間違いなくこの時代、ことに次世代の学芸学問や芸術の自由を確保するために、様々な活動を共にした。「知友」とは辞書にあるように「互いに深く心を知りあっている友」であるなら、間違いなく鷗外にとって岩村透は、美術界における「知友」の一人だったのである。

今橋映子
いまはし・えいこ

1961年、東京生まれ。現在、東京大学大学院総合文化研究科・教授。博士（学術）。専門は、比較文学・比較文化。『異都憧憬 日本人のパリ』（柏書房、1993年）でサントリー学芸賞、渋沢クロード特別賞を受賞。『（パリ写真）の世紀』（白水社、2003年）で重森弘海写真評論賞、島田謹二記念学芸賞、日本写真協会賞学芸賞を受賞。他にも『フォト・リテラシー』（中公新書、2008年）、『展覧会カタログの愉しみ』（編者、東京大学出版会、2003年）、『近代日本の美術思想——美術批評家・岩村透とその時代』（白水社、2021年）など著書多数。



文京区立 森鷗外記念館NEWS

No.40



鷗外直筆原稿「波江抽斎」その四十九、その五十 カロワークス撮影

目次

森鷗外没後100年、文京区立森鷗外記念館開館10年によせて 成澤廣修(文京区長)、高橋唐子(当館館長) / 開催中の展覧会 コレクション展「鷗外の東京の住まい」/ 活動報告 / 展示会場から / 展示のお知らせ 特別展「鷗外遺産～直筆資料が伝える心の軌跡」/ コラム「学芸の自由は誰が守るか——知友・岩村透と森鷗外」今橋映子(東京大学大学院教授) / これからの催しもの / カフェ便り / 2022年度後期開館カレンダー / 編集後記

鷗外生誕160年 没後100年 鷗外100年の森へ